

【連載：「私とオーディオの出会い」 Vol.1】

一般社団法人日本オーディオ協会 会長 小川 理子

「ご挨拶」

日本オーディオ協会の会長という大役を拝命し、身の引き締まる思いです。業界の大先輩には、あなたの使命である、と激励していただきました。

これから少しの間、私の自己紹介を兼ねて、徒然と、音、オーディオ、音楽に関わることを書かせていただき、連載をさせていただこうと思います。等身大の私を知っていただく機会になれば幸いです。

「私とオーディオの出会い」 Vol.1

私は昭和 30 年代後半の生まれである。

物心ついた時には、家のリビングには、大きなステレオがあり、毎晩のように父がジャズやクラシックのレコードをかけてくれていた。私と二才違いの兄には、たくさんの年上の従兄弟達がいて、祖父母の家に遊びに行つては、流行りの洋楽のレコードのお下がりをよくもらって帰り、家でかけて楽しんだ。

そして、昭和生まれの女子なら、たいていはお稽古ごとにしていたピアノ、私も 3 才からクラシックピアノを始めたが、リビングで聴くレコードから流れてくる音楽を耳で覚えて自己流で弾くのが楽しかった。幼稚園児で父と一緒にスウィングジャズを楽しむおませな女の子だったが、時の流れとともに、歌謡曲から、ポップス、ロック、R&B、フォーク、フュージョン、ハワイアン、レゲエ、映画音楽、など、音楽ならジャンルにとらわれずに、自分の好きな曲をかたっぱしから聴いて育った。

レコードを聴く、という私の中のオーディオの世界に新たな点が加わったのが、自分の演奏をカセットテープに記録してもらった小学低学年のピアノの発表会、父がとてもとても大きなテープレコーダーを会場に持ち込んで録音してくれた。たぶん、まだ、市場に出たばかりの機器を、私がヨチヨチしていた頃に父が手に入れたものだったと思うが、演奏がどうこうと言うより、自分の音が残されて再現される、という特別な時空間の感覚を体験した。

兄の中学入学祝いに、両親が、大きな 4 チャンネルステレオを買って、気持ちよく音に包み込まれるという新たなオーディオの体験をしたことも、今懐かしく思い出す。

成人するまでの昭和の時代、友達同士でのレコードの貸し借りや、カセットテープの交換、深夜のラジオ、海辺のカセットデッキ、など、今思えば豊かな、オーディオとのさりげない出会いが日常にあふれていた。

音楽好きが高じて、大学時代に専攻した生体工学で生体リズムを研究し、リズムのもつ本質的な面白さに気づき、自分の個性が活かされる仕事は何だろうと探し求めて出会ったのが、音響の世界だった。

右も左もわからず社会人としてスタートしたのが、当時の松下電器産業(株)音響研究所、ここで私は、いわゆるオーディオ道に目覚めたのである。

この続きは、次回に。。。。



6月に行われたJAS通常総会にて左から経済産業省の津田様、渡辺様、小川 会長